2024年8月18日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

古里へと帰る（その1）

［創世記33章1～11節］

ヤコブが目を上げると、エサウが四百人の者を引き連れて来るのが見えた。ヤコブは子供たちをそれぞれ、レアとラケルと二人の側女とに分け、側女とその子供たちを前に、レアとその子供たちをその後に、ラケルとヨセフを最後に置いた。ヤコブはそれから、先頭に進み出て、兄のもとに着くまでに七度地にひれ伏した。エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。やがて、エサウは顔を上げ、女たちや子供たちを見回して尋ねた。「一緒にいるこの人々は誰なのか。」「あなたの僕であるわたしに、神が恵んでくださった子供たちです。」ヤコブが答えると、側女たちが子供たちと共に進み出てひれ伏し、次に、レアが子供たちと共に進み出てひれ伏し、最後に、ヨセフとラケルが進み出てひれ伏した。エサウは尋ねた。「今、わたしが出会ったあの多くの家畜は何のつもりか。」ヤコブが、「御主人様の好意を得るためです」と答えると、エサウは言った。「弟よ、わたしのところには何でも十分ある。お前のものはお前が持っていなさい。」ヤコブは言った。「いいえ。もし御好意をいただけるのであれば、どうぞ贈り物をお受け取りください。兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。このわたしを温かく迎えてくださったのですから。どうか、持参しました贈り物をお納めください。神がわたしに恵みをお与えになったので、わたしは何でも持っていますから。」ヤコブがしきりに勧めたので、エサウは受け取った。

[1] 自分の原点に戻れるような気持ち

 一昨日などは台風がどうなるかというような心配もあって、お出かけの予定が変わってしまったという方もいらっしゃるかもしれませんね。古里（故郷）に帰られたり、帰る予定だったという方もいらっしゃいますか？私は小さい頃からずっと東京の練馬区で過ごしてきましたから、いわゆる懐かしい田舎というものを持っていませんので、そういう所を持っている人が少し羨ましいと思うことがあります。きっと古里に帰るというのは、そこに幼い時の思い出もあったりすると、変わらない風景などにも出会って、何か自分の原点に戻れるような、気持になれるということもあるのではないかと思います。

　今日は「古里へと帰る」という題を付けさせて頂いたのですが、これは、私たち自身の存在の、と言ったらいいでしょうか、本当の意味の「帰る所を持つ」ということの幸いといったようなものを分かち合いたいと思ったからです。それを、旧約聖書・創世記のヤコブの人生から続けて見て行きたいと思います。

[2] 古里へ帰ることを決意するヤコブ

　創世記25章から始まったヤコブ物語は今日の33章で頂点を迎えると言って良いと思います。いえ、私たちは忘れてはいけないと思うのは、これは、ヤコブの物語でありますが、双子として生まれた兄エサウの物語でもあります。兄エサウは弟ヤコブに騙され、父イサクから、受ける事が出来る筈だった長子の権利と、また父エサウからの祝福とを横取りされてしまったのですね。しかもそれには、ヤコブの方に肩入れする母リベカの偏った愛がありました。エサウの方は父イサクに「祝福は一つしかないのですか？」と泣き付きましたが、イサクは「わたしはどうすることも出来ない」と地団駄を踏みます。エサウはこの時は、弟ヤコブを打ち殺したいと思うほどの憎しみを抱いたのですね。それに気付いた母は、愛するヤコブを、お前は暫らくはここではなく、伯父ラバンのいる遠くのハランに逃れなさいと外へ出すのです。ヤコブは実はその後20年間この古里に帰ってくることは出来ませんでした。初めは予想もしていないことです。このエサウとヤコブは、ほぼ同じ時期に同じ命を与えられた双子であり、別人格ではあっても、ある意味、鏡のような存在であった二人であると言えるかもしれませんが、その二人は、もう顔と顔とを合わせることが出来ない関係になってしまったのです。よく「運命に翻弄される」という言い方をしますが、そう言いたくなります。

　私たちにも思い当たることがあるのではないかと思います。「なぜこんなことになってしまったのか」。「神がおられるのなら、こんな理不尽なことが罷り通ってよい筈はない」。「私の今のこの境遇は、ほとんど呪われているとしか思えない…」と思ってしまうようなこと…。

ヤコブのことを改めてみてみますと、彼は両親と兄の許を離れ、20年間古里に帰ってくることが出来なかったのです。聖書を読んで頂くと分かりますが、その間彼は伯父ラバンの娘たち（！）と結婚もするのですが、ラバンによって散々な目に遭っています。もう人生を投げ出したくなってもおかしくないような年月を送ります。しかしそんな彼は、既にハランに向かう荒野で、石を枕にして寝た時、夢の中で、天と地を繋ぐ階段の光景を見せられ、自分に語りかける神様の声を聴いた出来事、それがヤコブの人生の忍耐の支えになったと思います。28章25節です。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしはあなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」。― 彼は「ヤコブ（アーカブ）」という自分の名の通り、人を押しのけ、他人の踵をひっぱって生きるような、自己本位にも程があるような部分を持っていた人物でした。その彼が、ラバンの理不尽な仕打ちや、この間見た32章の神様の使いとの一対一の格闘の出来事も通しながら、神様と直面させられることによって、自分中心性が次第に緩められていったのではないかと思います。私たちの人生には、その節目・節目で神様の介入、助けがあるのだと思います。そしてヤコブは、神様からまた御声を聞いて、「今、古里へ帰ろう」と決意するのです。しかし何よりも恐れていたのは、兄エサウとの再会です。彼は自分をどうするだろうか…、もしかしたら私を殺すかもしれないという恐れがありました。33章を見て下さい。今、エサウは400人の者を引き連れてヤコブのもとに近づこうとしています。しかしこの時ヤコブが試たことは「おいおい」と思うようなことです。誰を前に置いたかというと、まず自分の側女とその子ども、次にレアとその子ども、そして一番愛するラケルとヨセフは最後尾です。これはもしエサウが攻撃してきたら、後の方の者たちは逃げられますね。ここにもまだ狡さが残っているように思います。しかしヤコブ自身はどうか。彼は先頭に進み出て、兄に会いに行こうとし、近づきます。映画で言えば息詰るような場面です。

[3] 和解という奇跡―神様のわざ

　ここで起こったことを見てみましょう。ヤコブは兄の許に着くまで「七度地にひれ伏し」ました（3節）。七度拝する行為は、最大の敬意を表す古代西アジアの習慣だそうです。そして股関節を痛めているヤコブにとって、これはかなり苦しい行為の筈です。それでも彼は兄に謝罪したかったし、痛みを伴いながらも謝罪したのです。これは、神の恵みに押し出された行為ではないでしょうか？素晴らしい神様の奇跡ではないでしょうか。

さて、その時兄エサウの方はどうしたでしょうか？これも本当に素晴らしい奇跡です。普通なら有り得ないことですから。こう書いてあります。4節。「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。」エサウの言葉は何も記されていませんね。しかし、言葉以上に何と雄弁な愛の姿でしょうか。「走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた」。ここで私たちはあの主イエス様が語られた「放蕩息子の譬え」（ルカ福音書15:11以下）を思い起こします。生前から親の財産を受け取り、遊びほうけた自分勝手な息子がボロボロになって古里に戻ってくる。その帰って来た息子の姿を父親が遠くから見出すのですね。そしてそれこそ「走り寄って抱き締め、首を抱き接吻した」のです！あの何の条件も付けず、ただその再会を喜ぶ父の姿と、この時のエサウの姿がだぶります。あの放蕩息子の譬えで主イエス様が語られたのは、私たちと神様との和解です。「和解」。普通、常識的には「和解」というのは、歩み寄ることだと言われます。対立を一旦脇において、条件を出す訳です。「ここまでするから対立はやめてね」と。でも、聖書の語る「和解」は、そうではないのです。そうじゃない。この創世記のエサウもそうです。被害者であるエサウは、ヤコブに対して殺すどころか、文句を言うどころか、何も言わず、ヤコブを抱き締めたのです。無条件の赦し。それがまずあった。ヤコブはこの時、本当に心の重たい荷物を降ろす事が出来たのではないでしょうか。ヤコブはこの時、神様の憐み、恵みを思ったのです。10節にこうあります。「兄上のお顔は、わたしには神の御顔のように見えます。このわたしを温かく迎えてくださったのですから」。これは、兄を神格化しているのではなく、神様がこんな自分このようにして関わって下さっている、その事実に心震えたのだと思います。これはまた、ヤコブだけでなく、エサウにとっても大きな出来事であったに違いないと思います。

エサウ自身、20年間苦しんできたと思います。自分の目先のことに心奪われる弱さも身に染みたと思います。後悔もあったと思いますし、俺の人生は呪われているのだろうか？と思ってもおかしくない半生だったかと思います。つまり、ヤコブもエサウの二人とも、（彼らは、双子という同時期に命を与えられた、比較などは本当は無意味な二人です）、ここで和解が出来なければ、傷ついたままの人生なのです。それが、ヤコブがエサウのもとに帰って来たことを通して、自分たちが元生活をしていた場所の近くで、実現したのです。これは神様の不思議な配剤ですね、人間の思いを超えたプランですね。

私たちもそうなのです！神様は私たちが傷を持ったまま、或は、「赦せない」とか「自分の人生なんてどうなってもかまわない」といったような、自分が握り占めている荷物を持ったまま生きて欲しくないと思っていらっしゃると思うのです。ですから、無条件に「私のもとに来なさい、あなたがたを休ませてあげよう」（マタイ11:28）と、主イエス様が私たちに居て下さるのです！主の十字架の出来事というのは、人間に対する神様からの一方的で、完全な赦しなのですね。

私たちは、何度も何度も、本当の古里、十字架のもとに帰っていく必要があるし、帰って行って良いのですね。本当の「和解」というのは、本当ならば裁かれても仕方がない人間に対して「走り寄り、首を抱いて口づけ」する、その神様の、イエス様の愛のふところに戻ること、それを受け入れるところから始まるのだと思います。神様からの和解を頂いて生きて参りましょう。お祈りを致します。